



D O N C どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL 059-226-2766
FAX 059-229-0967

N° 60 avril 2002 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

LE CHEMIN DES PEINTRES CONTEMPORAINS DE PROVENCE

三重日仏協会創立15周年記念事業II

“プロヴァンスの光と風” 現代南フランス三人展

5月末から四日市・近鉄百貨店で開催

本会の創立15周年を記念する事業として、昨秋のボジョレ新酒パーティーに続き、来たる5月29日(水)から四日市市で南仏の三人の画家による展覧会を開催することとなりました。これは去る1998年「日本におけるフランス年」に、本会の主催によって三重県立美術館で開催した「太陽の地プロヴァンス・日本展」の際、出展、来日し、それ以来本会とさまざまな形の交流が続いているマルセイユ在住のアルランディス画伯が中心となってアレンジした美術展で、会場提供その他、中部近鉄百貨店四日市店の大きなご協力を得て実現したものです。出展される作品はアルランディス氏のほかヴィクトル・バッシ氏、マリー・ノエル・デレトワール夫人の計約90点の油彩画のほか、リトグラフ100点という大がかりなもので、希望者には販売されることになっています。また3人とも来日し、期間中は基本的に会場に常駐するとともに、会場で2回の実技デモンストレーションを計画しており、それも楽しみです。

なお三人の画家の四日市滞在については、四日市市在住の本会会員の方々のボランティアによりホームステイをお願いすることになっております。

主催：三重日仏協会 協賛：中部近鉄百貨店四日市店 後援：フランス総領事館
四日市市教育委員会

日時 5月29日(水)～6月3日(月) 毎日10時～19時

場所 中部近鉄百貨店四日市店11階「近鉄アートホール」

出展芸術家のプロフィールはP. 4をご覧ください

プロヴァンスを旅して

大原里歩



カマルグ地方の村で「羊飼いの祭」に出会った。その屋台店の前で、アルランディス夫妻と。

昨年初冬、ひょんなことからマルセイユへ。三重日仏協会にはすっかりおなじみの画家アルランディス・ローザ夫妻と共に、車でプロヴァンスを巡る気ままな旅でした。マルセイユでは恒例のサントン人形市の小屋が目抜き通りに並び、クリスマス・イルミネーションで華やぐ一方、イスラムのラマダンの月間でもあったので、夕暮れ時の街のあちこちには、日没を待つ男達の行列がレストランの前に出来ていました。アフガン向けか戦闘機も飛んでいきます。

家ではローザの料理に合わせて彼がワインを出してきました。彼らは昼食が主です。例えば、うさぎとバレンシア米、青豆、インゲンの煮込みとか、フォンデュ・ブルギニオン（卓上でんぶら牛肉版）に6種のソース添え、それにサラダやハム、サーモンがオードブルとして出てきたりします。その後で今度は数種類のチーズを各自好きなだけ切りますが、あんまりお腹が一杯なのでほんの少しにしたら、

「ネズミか？」と笑われました。続いてデザート、果物、アイスクリームにリキュールをかけて。最後エスプレッソでやっと終わりです。それから「さあ今からボンデュガール（古代ローマの水道橋）へ行こう」。そこは片道150キロの彼方です。朝から出かける時もありますが、昼からの時でもこんな調子でした。最高速度？キロで。

プロヴァンスはどこも美しい。けばけばしい看板や安っぽい工業製品も目につかず、太陽の下の風景も夜景もすばらしい。中でも私はここプロヴァンスの光の透明感もたらす夕日の美しさに圧倒されました。魔術師がいるかと思うような日没の色、冬なのに延々と続く残照、場所により異なる色調、二時間にわたり繰り広げられる光と色のスペクトル。カナイユ岬から見た港町カシスは紺青、シャトー・ヌフ・デュ・パープのぶどう畑は黄金色、大湿原カマルグは虹のグラデーションの中で闇に消えていきました。その後にくる真っ暗闇の中のドライブ、家の灯一つ見えない大地、強烈な光と闇のコントラスト。それはもう「星王子さま」の世界でした。

そんなある日の午後、南仏在住の瀬古由里子さんと会う為、旧港そばのカフェへ急いでいた時のこと。渋滞です。やっとのことで旧港入口、サン・ジャン要塞を曲がったとき目に入ったのは道一杯の警官の姿でした。なんとそれは警官のストライキ。彼らが渋滞の元凶だったのです。ストは翌日も。二車線占領してのパトカーのデモ行進に道行く人々も目を見張っています。マルセイユは大混乱。ストには慣れっこのはずのフランス人もこれにはびっくり、いらいらの二日間でした。因みに、いつも車を入れる旧港そばの駐車場は地下6階迄もぐります。古代の港跡を利用して造られていて、普段はともかく去年の豪雨の時には水没し、彼の車も大損害を被ったのだそうです。

この旅の私のもう一つの楽しみ、それはアルランディスが制作した壁面とステンドグラスを見ることでした。壁面は、ある建物玄関全面に南仏の山と裾野に広がるラヴェンダー等の風景をタイルに焼き、繋ぎ合わせた色のきれいな見事なものでした。ステンドグラスは村の中世の教会にありました。キリストの顔などが描かれた十枚の窓を通して差し込む光で、内部は母の胎内にも似た安らぎを醸し出していました。司祭室には十四世紀の木彫の聖母像もあり、老司祭から教会用の特別のワインも出していただきました。絶品でした。

数え切れない思い出を抱いて、みんなによろしくといつまでも手を振る彼等を後に、マルセイユ空港を飛び立ちました。あっという間の二週間でした。

フランスに生きる三重県人 (VI)

パリに暮らしてみて

2002. 3月

藤原 かおり (津市出身・在パリ)

主人が在フランス日本国大使館に赴任することになり、3年前からパリに暮らし始めました。主人にとっては、以前ジュネーブで働いていたこともあり、2度目の海外生活でしたが、私にとっては初めての海外生活でした。

まず、最初、街並みの美しさや洗練された様子に驚きました。とても月並みですが、フランス人の街づくりに対する意識の高さに感銘を受けました。

パリに暮らして、ヨーロッパ各国を旅行する機会がありましたが、いつもパリに戻ってくる度に、その完成度の高さを再認識させられました。

その一方、実際に暮らしてみると、日本とは異なるフランスのシステムや習慣に驚いたり、困惑したりしました。信じられないくらい、ゆっくりした窓口の対応、約束をあっさり破る配達員、頻発するストライキによる交通機関の停滞、さらに閉店15分前にはすっかり後かたずけに入って、入店を拒否するお店……。これらには、最初うんざりしていました。しかしながら、年月が経ち、これらに慣れてくると、万事きちんとした日本が、そのためにいかに労力を払っているかと考えると、フランス流のやり方に一定の合理性を感じるようになりました。

また、主人の仕事を通して、多くの各界のフランス人と出会い、親しく交流する機会を持つことが出来たことは、本当に良い経験でした。主人が教育・文化担当の一等書記官として赴任したこともあり、日頃お付き合いをするフランス人も親日的な方も多く、日本文化への造詣の深さに驚かされることもありました。これらの方々を、自宅にお招きした際には、お箸を上手に使いこなし、何の抵抗もなく楽しそうな様子に、日本食のフランスへの浸透振りを目の当たりにしました。

今、日仏間の関係は、シラク大統領が大の親日家であること、また、日産、ルノー間の提携やトヨタのバレンシエンヌへの進出によって、雇用が促進されたこと、さらに、インテリアや雑貨などにアジアテイストのものが大人気であること等から、これまで例を見ないほど良好な状態にあるようで、そのような時期にパリで過ごせたことに幸せを感じています。今後、ますますの日仏友好関係の進展を願ってやみません。



パリの自宅にて

藤原かおりさんは、本会会員宇野紘子さんのご長女です。近く帰国のご予定。

『現代南フランス三人展』出展者のプロフィール



ARLANDIS (*Antoine RICART*) アルランディス

1946年、スペイン生まれ、幼少期をアルジェで過ごす。1957年南仏に移り、現在はマルセイユ在住。幼いときから美術に親しんだが、観光業に従事した後、マチスと親交のあった画家ミミル・ロッシュの影響を受けプロの画家として独立した。ナイフを駆使した油彩画が中心。最近マルセイユの出版社より自伝的作品『光の画家アルランディス』が出版された。



VICTOR BASSI ヴィクトル・バッシ

1952年、アルゼンチン生まれ、ブエノスアイレス美術学校に学ぶ。スペインやフランスの画家たちと出会い、プロヴァンスに魅せられるなかで、独自の地中海スタイルを確立した。作品はすべて油彩でナイフ画法。南フランス、サントロペ在住。



Marie Noëlle DELETOILE マリー・ノエル・デレトワール

1961年、フランス、ヴェルサイユ生まれ。1992年、制作環境を求めて南フランスに移り住み、現在にいたる。リュテス・アカデミー卒業。国際展で銅メダル獲得。ナイフ画法で油彩画に取り組み、「光と透明感と色を追求」している。

催物の案内

今年もリヨンから企業研修生

今年も4月1日、四日市近鉄百貨店にリヨンから企業研修生が着任しました。リヨン第二大学経済経営大学院生の Emilie KANDIN エミリー・カンダンさん。エミリーさんは二年前すでに龍谷大学に留学した経験があり、日本語も堪能とのこと。

4/28 四日市響演奏会 近藤さんがソリストに

四日市交響楽団の第24定期演奏会が来たる4月28日(日)午後1時半から四日市市文化会館で開かれますが、近藤綾子さん(本会会員・四日市市)がソリストとして出演、チャイコフスキーのピアノの協奏曲第一番短調を演奏します。入場は前売り1,000円、当日1,200円

6/8 塚本聖子ピアノリサイタル

6月8日(土) 18:30開演 名古屋しらかわホール

指定 3,500円 パルコニー 3,000円

ベートーヴェンのピアノソナタ op.31-3のほか バッハ、ショパンの作品

塚本聖子さんは三重県桑名市出身、1991年フランス政府給費留学生として渡仏、パリ国立高等音楽院をプルミエ・プリを得て卒業。現在、ヨーロッパ各地でリサイタルやコンチェルト等の演奏活動を行っております。昨年11月、ジュネーヴ国際音楽コンクールで第3位受賞。

寄贈書籍

フランス・ルネサンス舞踊紀行 原田宿命著 未来社 2002年1月刊

著者より三重日仏協会に寄贈いただきました。既刊『ルネサンス舞踊紀行・イタリア』に続く第二篇、写真も豊富な美しい労作です。閲覧希望者は事務局まで。